
Creation of Origin ～幻想たる魂～

如月 充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Creation of Origin 〈幻想たる魂〉

【Nコード】

N2305Z

【作者名】

如月 充

【あらすじ】

2112年。オンラインゲームも過去と比べかなり進歩し、殆どがVRとなっていた。

その中でも、特に人気なのが、運営会社【ワールドクリエイト?】が造ったVRMMORPG【Creation of Origin】というゲームだった。その理由は、基本プレイは無料だが月500円で【ワールドクリエイト?】から自分専用のサーバーを準備してもらい、そのサーバーに【ワールドクリエイト?】が提供するオブジェクトを配置していき世界を創造することが出来る上に、フ

レンドと一緒にその舞台を冒険できる為だ。更に、自らクエストを作る事も可能である。

そんな、大人気オンラインゲームを駿河浩司は春日繁人から誘われプレイを始めるのだった。

第1話（前書き）

2011／12／08 おかしいと思われる地の文章を何箇所か修正。

第1話

2112年4月27日。駿河浩司^{するがこうじ}は、ベッド、勉強机、クローゼット、そして卵形のVRシステム『エッグ』のある自分の部屋で、ワクワクとした表情で、横に設置されている『エッグ』を見ていた。今、浩司は『エッグ』にVRMMORPG【Creation of Origin】というゲームをインストールしている最中である。

【Creation of Origin】とは、今世界で一番ユーザー数の多いゲームと言われている。その理由は、基本プレイは無料なのだが、運営会社『ワールドクリエイト?』に月額500円という安さで自分専用のサーバーを用意して貰い、そのサーバーに『ワールドクリエイト?』が用意しているオブジェクトを使って、世界を創り、創った世界で冒険をする事が出来るのである。もちろん、他のユーザーもだ。

更に、自らクエストを創る事が出来るのである。ただ、残念ながら自ら創ったクエストには参加できないため、友達と一緒にそのクエストを楽しむことは出来ないらしい。ここは、少し残念な気持ちになる。

しかしだ。このインストールさえ終われば、無限の世界が広がっていると思うと浩司は、気持ち之急いてくる。まだか、と思い『エッグ』と繋がっている勉強机の上に置かれているデスクトップパソコンを見る。

その画面の中央には、小さなウィンドウが表示されておりそこには、【Creation of Origin】インストール中! 90%完了! 後約1分と表示されていた。

あゝ、早く終われ! と願いつつも浩司は携帯を取り出し、このゲームをやるきっかけを作ってくれた友達にメールを送る。

——シゲ、後1分でインストール終わる。

というメールをシゲ。春日繁人^{かすが しげと}という名前の高校に入ってから出来た友達に送った。

メールを送って、インストールが完了したというメッセージが表示されて直ぐに浩司の携帯に、受信を報せる音楽が流れる。

——りょーかい！ 俺は、もう入ってるから、ヴェスナーってキラが俺なんだけど、入ったらヴェスナーにメッセ送ってくれ！

浩司は、内容を確認すると携帯を机の上に置き『エッグ』の中へと入る。『エッグ』の中は、淡く青白く照らされてベッドが置かれている。浩司は、ベッドの上に置かれている目まで隠すヘッドセットを手に取り頭に被る。そして、被った状態のままベッドに仰向けになる。

すると、浩司の視線には様々なVRに対応しているソフトの一覧が表示される。そして、先程インストールしたばかりの【Creation of Origin】のマーク。正面を向いたローブを被った人間が、下にある小さな地球だろうか？ 青い球体に、両手を添えるようなマークがあった。何だか、ゲームタイトルとイメージ違うな〜と思いつつもゲームを起動させる。

「クリエイションオブオリジン、起動！」

浩司は、音声起動によりゲームを起動させた。すると、突然視界が暗くなり浩司の体の感覚が、死んでいくように無くなっていく。

「（いや、死んだ事無いから判らんけどな？）」

5秒ぐらい経つと、浩司の視界が元に戻る。しかし、そこに映って

いるのは、先程のVR対応ソフトの一覧表示ではなく、円形で、中央に黄金に輝く椅子がありそこには、白くなったひげをかなり、たぶん10センチぐらい伸ばしている茶色いローブを着た爺さんが座っていた。そして、この場所は空にでも浮いているのかやたらと空が近い。

浩司は、とりあえず無事にゲームの中に入ったと認識する。そして、自分の姿を見ようと思い、顔を下に向ける。そこには、素肌が表示されていた……何てことは無かった。体全体を見る。どうやら、椅子に座っている爺さんと色が違って白いローブを着ていた様だった。とりあえず、どうすれば分からないが、爺さんに近づけば何か起こるだろうと考え爺さんに近づいていく。

「汝、名は？」

爺さんと、後4・5歩の所まで近づくと突然そんな問い掛けが爺さんの口から聞こえてきた。浩司は、まさかそんな問い掛けが急にされるとは思ってなかったため咄嗟に、

「浩司」

と言いそうになったが留まる。

俺は、ゲームを起動させてこの空間にやってきた。ならば、此処はゲームの世界だろ？　なら、その世界で名前を問われるという事はキャラの名前を決める場面じゃないか！　と思ひ当たり冷や汗を垂らしている様な気持ちになる。

「（あぶねえ、あぶねえ！）」

名前か。何が良いだろと考える。この世界で何がやりたいのか浩司は思ひ出す。もちろん、冒険だろ。それに、モンスター魔物との戦闘。それに、色んな人と接触するんだ。色んな事を見聞きして成長していききたい

と思う。

「（よしっ！ 成長って意味の言葉にしよう！）」

英語で成長は、グロウス。他は……確かフランス語で、クロワサンス。イタリア語で、クレシタだったはず。何処かのネーミング辞典って本にそう載っていた気がする。

「グロウス」

浩司は、爺さんに向かってそう答える。すると、爺さんが、ビクツと肩を揺らす。そのまま30秒ぐらいか待って、漸く爺さんの口が開いた。

「グロウス。ふむ、良い名じゃ」

浩司、グロウスは内心その言葉に安心する。どうやら、他の誰かと被っていなかったみたいだ。被っていると、また考え直さなければいけないからめんどくさいんだよな。何故か、自分が使う名前の時はやたらと被ってしまう時があるんだよなと嫌な事を思い出してしまった。

グロウスは、それを振り払う様に頭を振った。

「わしは、ゼウス。また、会うときがあろう。それまで、頑張るが良い」

爺さんと名乗った名前に、ゼウス！？ と驚いているとゼウスが手を振り出した。そして、グロウスの体の周りに光が現れる。その光が現れると、またもや体の感覚が下から無くなっていく。その何ともいえない感覚に、顔を顰めていると全ての感覚が途切れ

視界が暗闇に染まる。暗闇に染まったと思った瞬間には、視界が景色を映し体の感覚が上半身から戻っていく。

VRのオンラインゲームは初めてだから、この部分的に体の感覚が無くなっていくのはもちろん初めてで何か気持ち悪い感覚が体を駆け巡っていく。

そんな事を思いつつ、グロウスは周りの景色を見渡す。

そこは、昔の時代に戻ったような景色が広がっていた。レンガとかで家が建てられていると思っていたグロウスは、目の前に広がる竪穴式住居に驚かされる。もうこれは、村というより集落と表現した方が正しい気がする。

何だか、場違いな場所に來た気がして早くシゲじゃなかった。確か、ヴェスナーだったな。にメッセージを送ろうと思い、ウィンドウを表示させようとする。確か、空中を右手で左から右に滑らすんだっ
たか？

と、少し自信無さ気に滑らせる。すると、合っていた様で右手を滑らせた辺りにウィンドウが表示される。そのウィンドウには、

ステータス——恐らく、今の自分の強さなどが分かるんだろう。

スキル——確か、アタックスキルポイントASPを割り振って覚えたり、レベルを上げたりするスキルと、そのスキルに該当する行動を取れば熟練度が溜まっていきレベルが上がるスキルの一覧が見れるんだろう。

アイテム——その名の通り、持っているアイテムが見れるんだろうな。

メッセージ——お、有った！ 後で、送ろう。

ログアウト——もちろん、ゲームから抜けるための機能だな。

一通り、ウィンドウに表示されたコマンド見ると目的であったメッセージのコマンドの辺りに指を突き刺す。すると、メッセージ機能が起動し左側の小さなボックスには、宛名。それさえ、入力終われば後は送る言葉を言えばその相手に送れるはずだ。うん、現実なら

傍から見れば変な人と思われそうだな。ゲームで良かった。
という訳で、シゲこと、ヴェスナーにメッセージを飛ばそう。

ヴェスナー——おい、俺やけど。今すぐ来れそう？

メッセージを飛ばす。無事に送れたのか気になってしまいい待っている間、うーんと唸ってしまふ。しかし、30秒も経たない内に返事が来た。

>ヴェスナー——グロウスって名前にしたんだな。ちょっと待ってろ。今向かうから。

そのメッセージを確認し、グロウスは座って待つ事にした。とりあえず、ヴェスナーが来るまで暇だから、よく見ていなかった周りを見渡す。

やはり、最初の場所のためか見渡してもいるのは自分と同じ白いローブを被ったプレイヤーが多い。それ以外には、1人だけやたらと派手な黄金に輝く兜に鎧を着ているプレイヤーがいたが、俺と同じ、始めたばかりの知り合いでも探しているのかなと特に気にも留めずに、今度は町というか集落だな。を見る。

視界に映るのは、竪穴式住居が四角形を形作るように建てられている。そして、その4つともが、中心に入り口を向いていた。その中心には、グロウスと同じくこの縄文時代みたいな場所とはかけ離れた物体があった。その物体は、見た感じコンクリートの様な素材で、丸い物体が1つだけ浮いていた。これが、色々な世界や、拠点へ飛ぶ事が出来るポータルって奴だな。そして、丁度前と、後ろに門があり、集落を囲う様に柵が設けられていた。

まだ、ヴェスナーが来る様子がない。何をして待っていようかと考えていると、ふと思ひ出す。そういえば、武器を装備していない事に。グロウスは、思ひ出すと再びウィンドウを表示させアイテム一

覧を開く。

そのアイテム一覧には、木剣、木刀、木の大剣、木の弓、おもちゃの銃、木の杖という名前のアイテムが表示されていた。グロウスは、その中からとりあえず木刀を選択し両手で持つ。刀は、両手が塞がる変わり攻撃力は高いが耐久力が低い武器らしい。

一通りやっている、中央に設置しているポータルからプレイヤーが現れた。

そいつは、銀色の鎧で全身を覆っており今は左手に兜を持ち、背中には大きな剣が背負われている。そのプレイヤーの顔を見る。

顔は、10代後半ぐらいで活発そうな顔をしている。髪は、短髪で金。両目の色は、水色だ。そして、鎧で隠されているが体は帰宅部の癖に引き締まった体をしている。

現れたプレイヤーは、ヴェスナーだった。何だよ、めっちゃ強そうじゃないか。

その感じたままを、ヴェスナーに向かって言ってみた。

「強そうって……。これでも、まだ、レベル32なんだけどな」

始めたばかりのグロウスに、レベル32が高いのか低いのか分かるわけがない。反応に困っていると、ヴェスナーが言葉を追加した。

「今の最高レベルは、限界レベルの70だよ」

なるほど、確かに32は低いのかも知れない。でも、それなら俺はどうなるって話だよ！ と内心で怒鳴る。ゲームを始めたばかりなのだからレベルは1。そんな事は当たり前なのだから、言葉に出すような事はしない。

「まあ、今レベルを言ったけどこのゲームじゃある程度の基準でしかないな。最高は70って言ったけど、最強は別のプレイヤーだし」

へえ、そうなのかと思いつつも、でもレベルは高い方がよいなとも思う。だが、レベル云々よりまず俺は、ゲームの説明だよ。システム関係は、ホームページで目を簡単に通したが、戦闘に関する事は時間の関係で見ることが出来なかった。だから、このゲームの戦闘形式は、実はまだ良く分かっていなかったりする。

「んじゃ、スキルとかの説明は後ですとしてまずは戦闘しに行くか！」

「おう！ 宜しく！」

ヴェスナーが、そのまま後ろにあった扉を潜り草原のフィールドへと出るのをグロウスも付いていく。しばらく、草原を歩いていると犬のような顔をしていて二足歩行をする魔物を見かける。

近づいていくと、その魔物の頭上に緑色のバーと【ドッグ・ザ・ロー】という名前が表示される。

「んじゃ、まず剣とかの近接系のスキルは動きで発動させる。そして、遠距離系のスキルは発動したいスキルの名前を言って発動させるんだ」

そう説明すると、とりあえず戦って来いとヴェスナーが言う。グロウスは、言われた通り戦うため、ドッグ・ザ・ローへ走り出す。ドッグ・ザ・ローに近づくと、両手で持つ木刀を振り上げ振り下ろす。グロウスの攻撃が当たり、ドッグ・ザ・ローの緑色のバーが半分ほどまでに一気に減り緑色から、黄色へと変化する。

攻撃を受けた事により、グロウスに気づき攻撃を仕掛けてくる。ドック・ザ・ローは右手に持つ剣を横に払ってくる。それを、グロウスは後ろに下がり避ける。避けると、右から後ろに回りこみ同じように横に払って攻撃する。

そして、その攻撃を食らってドッグ・ザ・ローは悲鳴を上げると体の動きを止め、体を分散させ消滅していく。

グロウスは、こうして初めての戦闘を難なく勝利したのであった。

「ほお！ さすが、やるなあ」

グロウスの戦闘に何処か感心した様な声を出したヴェスナーは、グロウスに近づいてくる。

「ま、戦闘はそんな感じで。とりあえず、始まりの集落に戻ろうか」

そう言って、ヴェスナーは集落のあった方角へと歩き出した。グロウスも、ヴェスナーの後ろについていきながら、やっぱ集落でよかったんだと思った。

第1話（後書き）

えー、まだ完結していない作品があるのに書いてしまった……。何やってんだと思いつつも後悔はしていないです。

出来れば、そちらも読んで貰えると嬉しいかな。

更新ですが、不定期なので申し訳ないですがご了承ください。

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録などして頂けると作者の励みとなりますので、よろしければお願い致します

第2話

プレイヤーキャラクター
駿河浩司のPC名グロウスが現実の友達、春日繁人のPC名ヴェスナーに誘われ、始まりの集落から草原のフィールドへ向かい、そこで【ドック・ザ・ロー】という犬顔の魔物との初の戦闘を勝利で収め、始まりの集落へと戻ってくる。

そして、他のプレイヤーの邪魔にならないように草原へ出る出入り口の端による。それから、先程の戦闘では保留していた説明が、ヴェスナーからされる。

「それじゃ、スキルの説明をするけどまずはスキル一覧を開いてくれ！」

ヴェスナーに促され、グロウスはスキルの一覧を表示される。そこには、戦闘系・生産系・パッシブと更に、分けられていた。

ヴェスナーの説明によると、戦闘系は更に剣技・刀技・短剣術・槍術・弓術・銃・火魔法・水魔法・土魔法・風魔法・治癒魔法・戦闘技術と12種類と分かれている。

剣技・刀技・短剣術・槍術・弓術・銃・火魔法・水魔法・土魔法・風魔法・治癒魔法は、レベルが上がって貰えるASPというポイント^{アタックスキルポイント}を消費し、該当するスキルを覚えて使う事ができるようになるスキル。そして、その覚えたスキルを使っていく度に熟練度が貯まりスキルレベルが上がっていく。

戦闘技術とは、既に空中戦闘・水中戦闘・暗闇戦闘と3種類のスキルを覚えていて、その特殊な戦闘を行うことで、該当するスキルの熟練度が貯まりレベルが上がるとその状況での戦闘が有利に運べるとの事だ。

そしてこのスキルを見て粗方分かるだろうが、武器の種類も、剣・刀・短剣・大剣・槍・弓・銃・杖の8種類となっている。

次に、生産系だが錬金術・鍛冶技術・薬学の3種類のみ。これも、既に取得しているので、熟練度を貯めるだけだ。

錬金術は、武器・防具に4属性を付加するスキル。鍛冶技術は、素材アイテムを使って武器・防具の製造。それに、使用して減った耐久値を回復させる修復作業も可能である。薬学は、HPやMPを回復させるポーション、麻痺・眠り・沈黙・毒・火傷などの状態異常を回復させる錠剤の作成。それぞれ、その行動を行うことで熟練度が貯まっていく。

次に、パッシブはこのスキルを覚える事で、その該当する効果が常時発動スキルだ。そして、パッシブはASPを消費してスキルレベルが上がっていく。

HP上昇・MP上昇・防御力上昇・麻痺耐性・眠り耐性・沈黙耐性・毒耐性・火傷耐性・剣上昇・刀上昇・短剣上昇・大剣上昇・槍上昇・弓上昇・銃上昇・杖上昇と一覧に表示されていた。

耐性系は、スキルレベルが上がる事によってその状態異常に罹りにくくなるスキル。HP・MP・防御力上昇は、スキルレベルが上がる事によって該当ステータスに、プラスされていく。剣上昇などの武器上昇系のスキルは、スキルレベルが上がる事によってその該当武器を使っている時に限って攻撃力が補正されるというスキル。

「という感じだな。それと、アドバイスだが武器はどれかに絞った方が良いぞ?」

「おう! 分かった。でも、どれを使おうか迷うな」

ヴェスナーのアドバイスに、どれを使おうかと迷ってしまう。魔法も使ってみたいけど、剣や刀それに銃も使ってみたいという気持ちもある。とりあえず、色んな武器を使ってみて選べば良いやと、今は武器選択は保留とした。

それから、ヴェスナーに始まりの集落にある武器・防具屋、アイテム屋・預かり所を案内されると、集落の中央にあるポータルの前に

やってくる。

その前に立ち、ヴェスナーはポータルを見ながらグロウスに話しかける。

「このポータルは街に設置されている。このポータルを使って公式サイトに公開しているユーザーが創った世界や、『ワールドクリエイト?』の用意している別の世界へと行ける。それと、同世界で訪れた事のある街ならポータルを使う事で一瞬で転送してくれる」

ヴェスナーは、ポータルで他のユーザーの創った世界に移動する際の条件があると言い、説明してくれた。条件とは、ユーザーが付けたワールド名。もしくは、フレンド登録していればユーザー名で移動できるとの事だった。

そして、フレンド登録の話が出てきた時そういえばまだフレンド登録をしていなかったと思い至り、その事をヴェスナーに告げる。

「ははっ！ そうだったな！」

そうグロウスに言われるまで、ヴェスナーも忘れていたのだろう。ヴェスナーは、苦笑を浮かべ、ついでにフレンド登録の仕方を教えてくれた。

言われた通りに、メッセージを送る画面を表示させ送る相手をヴェスナーにする。そして、フレンド登録の申請を送る。

ヴェスナー——フレンド登録、ヴェスナー。

グロウスがフレンド登録の申請を送ると、側でヴェスナーが何も無い空中に手を動かし、何かの操作をした。すると、グロウスの視線の先にシステムメッセージが表示される。

『ヴェスナーが、フレンド登録の申請を受理されました!』

どうやら、これでフレンド登録は大丈夫なようだ。そして、グロウスはいつの間にか夕食の時間になっている事に気が付きログアウトする事をヴェスナーに言った。

「わかった! それじゃ、俺も一旦落ちるかな。もし、今日また入るなら後でメッセ送ってくれ!」

「分かった。説明、ありがとな! 助かったよ!」

「気にするな、それじゃ此れから楽しく冒険しようぜ!」

そう言って、グロウスとヴェスナーは握手をして2人ともログアウトしてゲームの世界から消える。

PC名……グロウス Lv1 次のLvまで5

取得済みスキル……錬金術Lv1、鍛冶技術Lv1、薬学Lv1、

空中戦闘Lv1、水中戦闘Lv1、暗闇戦闘Lv1

装備……右手、木刀。左手、なし。頭、なし。体、初心者グローブ。

腕、なし。足、初心者靴。アクセサリ、なし。

第2話（後書き）

あの状況はまずいと思い、2話更新です。次回から、ちゃんとした冒険となります！ さて、浩司をどういうスタイルで行くのでしょうか？ その辺りも楽しみに待って頂ければと思います！

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録をして頂けると作者の励みとなりますので、よろしければお願い致します。

第3話

初めて、【Creation of Origin】にログインしてから2週間経った。この2週間は、本当に充実した日々だと駿河浩司は思う。まさか、ゲームにログインするのがこんなに楽しみな気持ちになるなんて、正直思ってもいなかった。

学校とかに行っても、シゲと殆ど【Creation of Origin】に関する話しかしていない気がする。しかも、時間があればノートとかに今まで集めた情報を書き写していたりしている。自分でも、よくやるもんだと感心している所だ。だが、これでもまだ始めたばかりということで、自分で世界を創ったりしていないし、シゲの創った世界や他のユーザーの世界さえまだ行っていなかったりする。

だから、このゲームのメインは遊んでいない事になる。まだ、運営会社である『ワールドクリエイト?』が用意した世界の最初の世界である【プリンキビウム】にしか行ってないのだから、これから色々な世界に旅立つと考えると凄く楽しみだという気持ちで一杯になる。

そう、今日は【プリンキビウム】から別の世界に旅立とうと考えている。その世界は、運営会社が用意している世界だというのに、公式HPやコミュニティなどでまだ、探索が進んでいないみたいであり情報が回っていなかった。

そんな世界が、あるのか? と疑問に思いシゲに聞いてみると、

「あゝ、あそこね。探索が進んでいないのは、本当だ。理由は、まあ……行ってみれば分かるさ!」

と、何故か少し気持ち悪そうな顔をしながら言っていた。

浩司は、シゲの反応が気になりながらも、シゲの言うとおりに行けば

分かるだろうと考え、帰ったら早速ログインしてその世界、【シュトライネイション】に旅立つつもりだ。

そして、学校が終わり家に帰ってくる。自分の部屋に入り、VRシステム『エッグ』の中に入りその中にあるヘッドセットを頭に付け、ベッドに横になる。

そして、ログインを開始し【Creation of Origin】の住人、グロウスになる。なる、といっても残念ながら【Creation of Origin】のプレイヤーキャラには、人間しかない。ならば、体型とか顔とか弄れるのかと言われると、いいえと否定するしかない。確か、認識能力に影響が出るとか何かで大幅な外見の変更は許されていない。許されているのは、髪型・髪の色だけだ。

ログインの影響で、一旦視界が黒く染まる。そして、再び視界が元に戻った時は、そこは【Creation of Origin】の世界だ。

グロウスは、自分がいる場所を確認する。目の前には、ポータルがあり、周りは木で囲われていた。そして、その木の上に木の板で作られた道があり、6軒ほど家が見える。此処は、始まりの集落から、南に8キロメートル程にある森の中の町【シバーヤフ】という所だ。グロウスは、前回ログアウトした時点でのステータスを確認するためステータス画面を開く。

PC名	...	グロウス	Lv20	次のLvまで	4039
HP	6218	MP	319	攻撃力	AP201
魔法防御力				防御力	DF310
MP	78			魔法攻撃力	MPP0

取得済みスキル...ヴァーバルストライクLv4、エアガイストLv3、五月雨突きLv3、ファイアバレットLv2、アイスバレットLv2、ウィンドバレットLv2、ガイアバレットLv2、3w

ayバレットLv3、HP上昇Lv20、MP上昇Lv15、防御力上昇Lv10、刀上昇Lv13、銃上昇Lv10、錬金術Lv1、鍛冶技術Lv3、薬学Lv4、空中戦闘Lv1、水中戦闘Lv1、暗闇戦闘Lv1

所属ギルド……フリー

装備……右手、打刀。左手、なし。頭、バルテスタ+2。体、バルコルポ+2。腕、バルアルム+2。足、バルクルース+2。アクセサリー、なし。

ライア……10238ライア

ステータスの確認を終えると画面を閉じる。その時に、見たライアの残り金額の少なさに驚く。10000ライアだと、武器を二回NPCの鍛冶屋で鍛えてもらったら無くなる金額だ。いくら、成功率100パーセントとはいえ上がる能力値もそんなに高くないというのに、一回5000ライアとか高すぎだよと思ってしまう。

金の事は、どうせドロップアイテムとかいらぬモンスターの素材とか売れば集まる事だし今は、目の前にあるポータルを使ってこの世界から出る事を考える。グロウスは、はやる気持ちを抑えポータルの前に立ち、ポータルを起動させる。起動させると、今この世界で移動できる町の名前が表示され、その一番下に他の世界へと旅立つという言葉が表示されている。

グロウスは、その言葉をタッチする。するとポータルの画面が切り替わり、移動したい世界の名前、もしくはフレンド名というポップが表示され目の前にホログラムのキーボードが表示される。グロウスは、そのキーボードを使い【シュトライネイション】と入力する。入力が完了すると、グロウスの体の周りに光り輝くフラフープの様に丸いモノが表示されグロウスの体を上下に行き来する。すると、突然視界が暗くなる。そして、暗くなったと思ったら視界が復活する。

視界が戻り、グロウスの目に映るのは木造の家が並んでいる。家と

家を仕切るのは、木製の柵で向かい合うように建つ家の柵の間が道となっているようだ。

そして、今グロウスが立ちポータルのある位置はこの町の中心地と思われ、東西南北と道が分かれている。それにしても、視界が暗いなどと思い空を見上げる。そこには、暗雲が空を覆っていた。その為、今が昼なのか夜なのかと分からなくなってしまうそうだった。

視界が悪いが、これは今はどうしようもないと思いグロウスはどっちが町の外に行けるんだ？
プレイヤーキャラクター と思い周りを見渡す。周りを見渡すが、そこにはPCはおらず、NPCばかりだった。
ノンプレイヤーキャラクター

ふう、とため息を吐き近くにいた女性のNPCに話しかけた。そして、振り向いたNPCは何かに怯えるような表情を浮かべ話し出す。

「魔王が、この近くに来ていって本当かい？ 何だって！ 南の洞窟に今は拠点を構えているだって！？ 誰か、様子を見に行ってくれないかねえ？」

そのNPCの話す魔王という人物が、南の洞窟という場所にいるということ。グロウスは、目的地を南の洞窟と決めて向かう事にした。おそらく、その洞窟に行けば何かしらのクエストが、発生するのだろうか。と見当を付けて。

ポータルのあった場所から、南へ向かう。10分ほど歩くと漸く町の入り口に着いた。それにしても、ゲームの中で10分も町を歩く事になるとはこの町結構広いんだなとどうでも良いことを考えてしまう。

そんなことを思いつつも、グロウスは1人で町の外に出る。外も、町の中と同じように暗雲のせいで光の差さない暗闇の場所となっていた。その為に、遠くまで見通すことができない。見える範囲だ、どうやら草原だと思われるフィールドだ。

そのまま、少し歩いているとモンスターらしき影が1つ見えた。グ

ロウスは、刀を抜刀状態にしてその影に近づく。その影は、足でも怪我しているかの様にガクガクと体を揺らしながら歩いている。その歩き方に変わったモンスターかなと思いつながら近づいていくとその様相が見えてきた。

そのモンスターは、武者が着ているような鎧兜を着ており、鎧兜の隙間から見える肌は、暗くて見えないが爛れている様に見える。警戒しながら、モンスターに近づくと完全に姿を現し、頭上にHPバーとモンスターの名前が表示される。そこに、表示されていたのは【落ち武者】だった。グロウスは、その名前に嫌なイメージをほぼ確定させつつも落ち武者にゆっくりと近づいていく。

グロウスの事に、落ち武者も漸く気づいたのか体全体をこちらに向けてくる。その落ち武者の顔を見て、グロウスは何故この世界が他のユーザーに嫌われているのか理由の一部かも知れないが、分かった。

その理由は、かなりグロテスクでリアルなのだ。その兜から覗く顔は、眼窩が抉れ目玉が飛び出ている。しかも、皮膚がなく肉が見えているのだ。おそらく、鎧の下も顔と同じ状況なのだろう。見ていたら、気分が悪くなってきたし戦う気力もなくなってきた。しかし、グロウスは何とか気力を振り絞り戦闘を開始する。

4・5メートルほど空いていた距離を詰めるためグロウスは走り出す。そして、後、1・5メートルほどの距離の時にグロウスは高くジャンプする。ジャンプして、落ち武者の頭上を飛び越える。飛び越える時に、右手に持つ打刀を落ち武者の頭に向かって振った。すると、スキルが発動する。落ち武者の後ろに着地したグロウスは、振り向きざまに打刀を両手で持ち直し落ち武者の首目掛けて振った。すると、今までのモンスターならどの部位で止めを刺そうが消滅のエフェクトを撒き散らすだけで終わった。なのに、この落ち武者は首と体が離れて消滅のエフェクトを撒き散らした。

「何で……こんなにリアルなんだよ……!？」
「うえっ」

グロウスは、ゲームの中だというのにえづく様な行動を取る。それほど、リアルなんだよと誰もいないのに説明したくなった。それにしても、何で『ワールドクリエイト?』は、こんなリアルな処理してるんだよ。完全に今のは18歳未満駄目だろ! と文句を言いたくなる。

グロウスは、暫くその場で休み少しは気分がマシになった。後でお客様サポートに文句言ってやると思い、先に進もうと歩き出す。もしかしたら、落ち武者なる魔物が徘徊しているのは、あのNPCが言っていた魔王が関係しているのじゃないかと思ひ先を進もうと思った。

そして、1人でフィールドを進んでいると奥から何やら大量の落ち武者に追われている女性プレイヤーがこちらに向かって凄いスピードで走ってくる。

それを、見たグロウスは後ろへ向き直る。そして、グロウスも逃げ出すように落ち武者たちに結果追われ始めた。

女性プレイヤーが、隣に並ぶ。

「ちょっと、君! 助けなさい!」

「ちょ!?! いきなり、助けなさいとか何だよ!? せめて、1体2体だろ!?! 何であんな数引き連れてんだよ、お姉さん!」

「洞窟の前に、居たんだからしょうがないじゃない!」

洞窟の前にあんなに大量の落ち武者がいるのかよ!? と叫びたくなる。後ろで追いかけてくる落ち武者の数。どうみたって、50体以上なんだから。グロウスは、早速魔王討伐に向けていた気持ちが折れそうになっていた。

グロウスと女性プレイヤーが、落ち武者50体以上に10分近く追われ続け町に入る事で、その逃走劇は終了した。

「はあはあ」

「はあはあ」

グロウスと、女性はお互いに息を整える。1分ほどして、漸くお互いに息が整い喋る事ができるようになった。

「ロイエよ。ごめんなさいね、迷惑を掛けたわ」

「グロウスです。いえ、おそらく自分も同じ事になったと思うんで」「ねえ、グロウス君。もしかして、君も魔王とかいう奴を倒しに行こうとした？」

「グロウスでいいですよ、ロイエさん。ええ、そうです」

「私のことも、ロイエでいいわ。ねえ、目的一緒だしフレ登録とパーティー組まない？」

ロイエの提案に、少し考えるがあ的大量の落ち武者は1人じゃ絶対に無理だろうと思う。1体1体は、弱い可能性があるが大量だと攻撃を防ぐ事も避ける事も限界だろう。ならば、2人。いや、出来れば後1人。3人パーティーを組めたら楽だろうなと思い、後1人は勝手にヴェスナーを誘おうと考え、ロイエの提案を受ける。

『ロイエとフレンド登録しました！』

『ロイエとパーティーを組みました！』

第3話（後書き）

何だか、オンラインゲームの話書いてたらオンラインゲームやりたくなってきましたw

でも、やり始めると執筆が遅くなるという事になる……。どうしよう？

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録などして頂けると作者の励みとなりますので、よろしければお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2305z/>

Creation of Origin ～幻想たる魂～

2011年12月10日09時45分発行